

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：83802

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23792631

研究課題名(和文) 悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズの明確化と情報支援ツールの開発

研究課題名(英文) Information Needs in Brain Tumor Patients and Their Families

研究代表者

津村 明美 (Tsumura, Akemi)

静岡県立静岡がんセンター(研究所)・その他部局等・その他

研究者番号：90595969

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズを明らかにし、QOL向上につながる支援やケアの開発を目的に研究を行った。

インタビュー調査から、「疾患や治療」「予測される成り行き」「予測される症状として脳機能低下による生活への影響」「日常のケア方法」「神経症状のマネジメント方法」の情報ニーズが明らかとなった。

脳腫瘍患者のQOL実態調査から、HGG患者はLGG患者と比べて、あらゆる病期でQOLスコアは有意に低い。HGG患者のQOLスコアは治療前から低く、術後は一時的に改善するが、再発時は治療開始時よりさらに低い値を示すことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to identify information needs of brain tumor patients and their families, and to develop the nursing for improve of their QOL.

Qualitative study was conducted. Their information needs were: disease and treatment; consequences to be expected; impact on life due to the expected brain function decline; the way of care for patients; and neurological symptoms management method.

HRQOL survey of brain tumor patients were conducted. QOL score of HGG patients were significantly lower than QOL score of LGG patients in all stages. QOL score of HGG patients were lower from the previous treatment. It had been temporarily improved by surgery, while that of the time of recurrence showed lower than at the start of treatment.

研究分野：臨床看護学

キーワード：がん看護学

1. 研究開始当初の背景

日本における原発性脳腫瘍の年間発生頻度は、人口10万人当たり12~14人程度と推定されている。脳腫瘍を原因とする年間死亡数は1,457人で、全悪性腫瘍死亡数の0.47%である。治療は、手術療法や放射線療法、化学療法、免疫療法を組み合わせた集学的治療が一般的である。しかし、手術療法による完全摘出を目指せば意識障害や麻痺などの神経機能の脱落をきたすため、完全治癒は困難とされている。

1) 悪性脳腫瘍患者・家族の療養生活に関する情報ニーズ

悪性脳腫瘍は、治療の奏効率が低く、病状の進行にしたがい意識障害を伴うことから、告知率が低い。告知をされていたとしても、悪性脳腫瘍は希少癌で、病理診断が多岐にわたるため、情報も少なく、患者・家族にとっては理解しにくい病態である。一般的に、悪性脳腫瘍患者は、日常生活を通して運動・感覚・高次脳機能障害などの脳機能悪化を自覚していく。患者なりに病状の進行を徐々に理解し対処しようと苦悩している。一方、家族は、初発診断時に医師から死の回避は不可能と伝えられ、患者の死を身近に感じながら出現する症状への対応に苦慮する。再発以降は、療養生活支援の過程で獲得した経験知を有するが、初発時と比べて症状の多様性や程度が増強するため、今後の生活に対しての不安を抱きながら終末期を迎える。申請者は、悪性脳腫瘍患者と家族員各々の認識する現状と現実の間にはずれが生じやすく、これらは、療養生活の質に影響することを明らかにしている。悪性脳腫瘍患者・家族がより良く過ごすためには、状況に合わせた療養生活の調整が余儀なくされる。そのため、悪性脳腫瘍患者・家族は情報へのニーズが高い

ことが報告されている。しかしながら、これらの報告は病期の区別が不明瞭なものが多く、患者がどのような状況に陥った際に、どのような内容の情報を必要としているのかは明らかになっていない。

2) 悪性脳腫瘍患者・家族に対する情報提供に関する課題

悪性脳腫瘍患者・家族に対して臨床の現場で行われているケアは、診断・治療期では合併症や有害事象マネジメントによる治療の完遂、再発以降は症状緩和といった医学モデルに基づくケアが中心である。よって、医療者から提供される情報は身体面に関する情報に偏っている。近年の在院日数の短縮化により、悪性脳腫瘍患者の家族は、再入院・治療を繰り返す過程で、家族としてのケアを行いながら患者と共に過ごすことになる。在宅での生活を再構築する方法や心理社会面での支援に関する情報ニーズは高いと推察されるが、それに対する情報提供は十分とはいえない現状がある。

2. 研究の目的

悪性脳腫瘍患者・家族の療養生活に関する情報ニーズを同定し、患者・家族がより良く過ごすためのニーズに沿った情報支援の在り方に関する示唆を得ること。

3. 研究の方法

1) 悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズの明確化

(1) データ収集

がん専門病院に入院する悪性脳腫瘍患者・家族を対象に、インタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接では、患者・家族の療養生活に関する情報ニーズについて、対象者が自由に語れるように質問し

ータ収集した。面接内容を逐語化しデータとした。

(2) データ分析

データは、内容分析(Krippendorff, 1980)の方法を用いて分析を行った。患者・家族の情報ニーズに焦点を当て、データを意味のまとまりごとに切片化し、類似性と差異性に着目しながら概念化し、サブカテゴリ、カテゴリを生成した。データ収集および分析の過程において、がん看護および質的研究の専門家によるスーパーバイズを随時受け、妥当性の確保に努めた。

(3) 倫理的配慮

静岡がんセンター倫理審査委員会の承認を得て実施した。

2) 悪性脳腫瘍患者の QOL の実態調査

1) の結果から、当初は医療者を対象としたデルファイ法によって、悪性脳腫瘍患者・家族に対して提供すべき情報の内容の同定を計画していた。しかしながら、研究をすすめていくにあたって、悪性脳腫瘍患者の QOL の向上につながる情報支援を考える前提として、悪性脳腫瘍患者の QOL の様相を理解することが重要であると考えようになっていった。また、悪性脳腫瘍患者の QOL に関する先行研究による知見は乏しく、その実態は明らかになっていないことがわかった。そのため、研究計画を変更して、悪性脳腫瘍患者の QOL の実態調査を行った。

(1) データ収集

がん専門病院に外来受診する悪性脳腫瘍患者を対象に、自記式質問紙調査を実施した。調査項目には、年齢、性別、診断名、治療内容、KPS (Karnofsky Performance Status)、MMSE (mini mental state

examination) QOL を測定するためのツールとして EORTC QLQ-C30 と BN-20 を使用した。EORTC QLQ-C30 は、がん関連の研究や臨床に用いられる多次元の評価ツール (プロファイル型尺度) で、運動 (physical)、心理 (psychological)、社会 (social)、経済 (financial) の面から直近 1 週間の 30 項目の日常的な機能評価を自己評価で行う。BN-20 は、直近 1 週間の脳腫瘍に特有の症状に関する 20 項目の質問事項が含まれる。

(2) データ分析

データ分析には SPSS Ver.18.0 for Windows を使用して、統計的手法によって解析を行った。

(3) 倫理的配慮

静岡がんセンター倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4 . 研究成果

1) 悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズの明確化

2011 年は、脳腫瘍患者・家族の情報ニーズに関する文献研究を実施した。

医中誌 Web や PubMed、その他のインターネットサイトを利用して、2000 年～2010 年の過去 10 年間分の脳腫瘍患者・家族のサポートニーズに関する文献を対象として、その中から脳腫瘍患者・家族の情報ニーズの検討を行った。

2011 年から 2012 年に、悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズに関するインタビュー調査を実施した。

文献検討の結果に基づいてインタビューガイドを作成し、悪性脳腫瘍患者・家族にインタビュー調査を行った。その結果、悪性脳腫瘍患者・家族の情報ニーズとして、

「疾患や治療」「予測される成り行き」「予測される症状として脳機能低下による生活への影響」「日常のケア方法」「神経症状のマネジメント方法」に関するニーズが高いということが明らかになった。

2) 悪性脳腫瘍患者の QOL の実態調査

2014 年 1 月から 12 月 (2013 年にパイロットスタディを実施) に、悪性脳腫瘍患者の QOL の実態調査を実施した。

調査によって得られたデータを、対象者の診断名から WHO グレードによって、グレード / の神経膠腫を low grade glioma (LGG)、グレード / の神経膠腫を high grade glioma (HGG) に分けて、LGG 患者と HGG 患者でそれぞれの項目を比較した。その結果、治療前、初期治療中、再発後とも、LGG 患者よりも HGG 患者の方が KPS、BN-20 の QOL スコアで有意に低い値を示した。HGG 患者の BN-20 の QOL スコアは治療前から低く、術後の初期治療中には一時的に改善するが、再発時には初期治療開始時よりさらに低い値を示した。

この研究の結果に関しては、現在、より詳細な解析と研究成果の公表の準備中である。今後、関連学会での発表および論文投稿による誌上発表を行っていく予定である。

3) 今後の課題

今後はこれらの結果を発展させて、悪性脳腫瘍患者・家族の QOL の関連要因の同定、情報満足度と QOL との関連などを明らかにしていき、実際の QOL 向上につながる情報支援のあり方を検討していくことが求められる。

5 . 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 津村明美: 家族の意思決定を支援する仕方を研究する, 保健の科学, 54(9), 602-606, 2012. (査読無)
2. 津村明美: 一歩踏み込んだがん患者の社会的苦痛への緩和的アプローチ Part2 がん患者とのコミュニケーション; 社会的苦痛を理解するために 患者・家族からの情報収集, 看護技術. 60(8), 764-767, 2014. (査読無)

〔学会発表〕(計 4 件)

3. 津村明美: 母親が脳腫瘍の終末期にある家族のつながりを支える看護, 日本家族看護学会学術集会講演抄録集, 第 19 回, 103, 2012.
4. 津村明美, 小島操子, 森本悦子, 樺澤三奈子: 悪性グリオーマ患者・家族の終末期の過ごし方の意思決定に影響する要因, 日本がん看護学会学術集会講演抄録集, 第 26 回, 246, 2012.
5. Akemi Tsumura, Ayako Miwa: Difficulties experienced by primary breast cancer patients and their families, Asian Oncology Nursing Society Conference, the 1st, 112, 2013.
6. 齊藤奈穂, 松本貴也, 津村明美: 在宅療養へ移行する脳腫瘍患者の夫の苦悩を軽減するための看護, 日本がん看護学会学術集会講演抄録集, 第 29 回, 340, 2015.

〔図書〕(計 1 件)

7. 小島操子著: 看護における危機理論・危機介入, 津村明美: 章危機状況にある患者の危機分析と看護介入, 第 3 版, 金芳堂, 京都, 155-167, 2013.

〔産業財産権〕
なし

〔その他〕
なし

6 . 研究組織

- (1) 研究代表者
津村 明美 (静岡県立静岡がんセンター)
研究者番号: 90595969
- (2) 研究分担者
なし
- (3) 連携研究者
なし